生かして天変地変を乗り越え今のキリン族の繁栄を築いた、題して「変わり者は世界を救う」全校朝会で二度話した。何かしらの印象を与えたと思うが、道徳的な価値に昇華させるには力量が足りなかった。

現職の頃は、子供の健全な発達を期し夢を与えるのが仕事と心得ていても、醒めた部分は拭えなかった。現実はもっと複雑でドロドロしているよな、というささやきがいつも聞こえた。先の話も、滅びた短首キリンの側に立つならば、こんな詩が生まれる。

「（略）何か言ってたよ。ライオンが岩の陰に隠れてるのが見えるとか、でも誰が信じるものかねあんなカワリモンの言うことなんか　あげくにうち等はネダヤシでそんなシレンってやつはよくある話だしそれがシンカだなんてうそぶいてるのもいるけどね（略）まあ夕日がお似合いってとこさクビナガさんには（『クビナガさんー進化論の狭間に』自作）」

教頭で退職したのは幸いだった。学校教育を代表する立場で終えたら、終生それにふさわしい言動が求められただろう。息苦しいことだ。

山歩きをしたり自然観察会のお手伝いをしたりしながら、世相や自然界の事象を、何にもとらわれず気ままに表現する楽しみを今味わっている。

三校統合「岩城小学校」を訪問して

山内　幸子

平成二十六年十一月十八日（火）本荘市立岩城小学校を訪問させていただいた。

この学校は、本荘市立松ヶ崎小学校、岩城町立道川小学校、岩城町立亀田小学校の三校が統合して作られた新しい学校である。日本海に沿って走る国道七号線を左に折れ、高速道路の下をくぐると間もなく目に白い大きな建物が見えてくる。

それが岩城小学校である。そして今、全国から参観が押し寄せている学校でもある。

それは「コミュニティースクール」

㊀　地域住民の学校運営参画

㊁　地域力を生かした学校支援

㊂　学校力を生かした地域づくり

人と地域と学校が双方向的に生かし合い、子供たちの成長を支えるシステムでその最先端を・・・・と言う学校である。

太陽をいっぱいに取り入れた校舎、昼食は全校児童が床暖のランチルームで。様々な活動にはたくさんのサポーターがいる。学習にクラブ活動に、技能教科に。つまり地域の方々がご自分の持っている力を生かしての活動である。そしてまた学校は地域の祭りに参加したり施設を活用したり…統合前から様々な交流を通して一つになる意識を大事に育て、立ち上げた学校。

整えられ過ぎた環境、教師や地域の方たちのありったけの配慮の下、子供たちはしっかり自分を発揮し、一体となって学んでいた。

少数・精鋭の大館北秋田市

清水　博司

大館北秋田の県退職教頭会の会員は、富樫清視氏と渡部長兵衛氏、それに私の三人しかいません。新会員が入ってくれるようにいろいろ加入促進の情宣も本部とタイアップして行ってきたのですが、なかなか困難なものがありました。

富樫先生や渡部先生は社会体育関係や地域振興の様々な活動で著名な方達ですが、寸暇を惜しんで会員拡大に努めて下さいました。私もボランティア活動の合間をぬって行ったのですが、新人会員は今までのところ皆無です。

会員は三人しかいませんし、自宅は遠く離れています。そこで、ふだんの活動はめぼしいことはほとんどしていません。秋田市で行う全県の役員会に時間を作って参加したり、総会・交流研修会等に出来るだけ参加することを第一義にまいりました。

ただし、平成二十七年度の「定期総会・交流研修会」は大館北秋田市が当番であったので、事前に三人が集まりやすい日時と場所で打ち合わせ会をひら

き、対応を協議して臨みました。

小畑勇二郎記念館やユップラ、北鹿ハリストス教会関係、ユニカール大会、大館郷土博物館や烏潟会館の見学、花善での昼食会等、全ての段取りを大先輩の富樫・渡部両氏が行って下さり、感謝した次第です。私は参加者の皆さんが気持ちよく活動できるように潤滑油的に動き回る立場に徹することしかできませんでした。

学校訪問も計画できれば良かったのですが、退職した教頭会員が、忙しい小中学校の現場に赴いて何を見、何を語ってもほとんど現場の役に立たないのではないかとの強い意見があり、大館北秋田市では行わないことにしたのでした。そのかわりに、博物館や聖堂の見学等、退職した教頭先生方に実質的に役立つ研修を企画。如何だったでしょう。

長崎県

平成二十六年の長崎大会冊子より

「人との出会い」

長崎西彼支部　田中　孝

人生の中で人は色々な出会いがあってどのように係ってきたのか。傘寿を過ぎると省りみることが多かれ少なかれある。

青少年時代、社会人時代、退職後の生活の中で多くの人と出会い喜怒哀楽の想い出をつくってきている。それは、現在良くも悪くも懐かしく思い出される。その中で自分としては特別な想い出が幾つかある。

その一例を述べると、昭和四十年頃、長崎市内中学校勤務で二年生担任の時に出会った女生徒との想い出である。この生徒は孤独で殆んどお話することがなく、自分の席に座っていることが多く、自閉的な生活であった。

そこで、数人の女生徒に話しかけてやるように頼んだり、私も適宜声をかけるように心がけた。三年生の時は他の先生が担当した。卒業後家事手伝いをすることになったと担任から聞いていた。

歳月は流れ、彼女が成人になった頃、突然年賀状を頂くようになり元気で居ることがわかり、それから数年後拙宅を訪れるようになった。私は主に家族のようすや家庭での仕事、将来の希望などについて尋ねることが多かった。来訪は数回続いたがその後は年賀状で交流していた。

それから、彼女が三〇歳を過ぎた頃、突然手紙を頂いた。内容は結婚することになったので友人代表として挨拶をお願いしたいということであった。私は熟慮の末、親戚や地域の親友の人にお願いするようにすすめた。

やがて、結婚式に招かれて祝福と安心のひと時であった。

ところが、一か月も過ぎない内に離婚したとの手紙を頂き、びっくりすると同時に悲しみを感じた。私としては、これから希望をもってご両親を大事にして生活するように励ます以外に言葉がなかった。

それ以後は音信がなく、彼女にとって幸せな日々を送っているだろうと思っている。

熊本県

会報　第六十五号より

「教頭生活悔いなし」

米原　久美子

私の教頭生活四年間を振り返ってみたいと思います。年間の見通しを立てることなくスタートした一年目は、湧いて出る仕事を無我夢中でこなしていった毎日でした。電話対応にも追われた日々。翌週の仕事をえると、週末の休みは、出勤することが休養と感じたものでした。

ＰＴＡ・地域活動機能が充実していて、毎日ＰＴＡ役員さんをはじめ、地域の方々が来校されました。役員さん作成の保護者向けの配布物の点検や承認、役員会への出席など、ＰＴＡ活動に関わる時間も大きなウェートを占めました。しかし、時間をさいて

学校へ足を運んで下さる保護者の方との会話は、私にとって楽しみでもあり、学校、そして地域が一体化していることを実感できた時間でもありました。

二年目は、一年目の反省を基に、年間の見通しを立ててスタートを切ったつもりでした。しかし、予想と現実は大違い、経験しなかった仕事が生まれ、あたふたする日は続きました。むしろ、自分のすべき仕事内容の重要性が分かってきた分、一年目以上に緊張した年でした。

四年目は、教職生活最後の年ということもあり、三月三十一日へのカウントダウンを刻み、バトンタッチができる体制を作りながら、最後となる一つ一つの仕事を終えた一年、毎日のように朝から迎えに行った子どもや教室に入ることが出来ず、別室で学習する子どもとの関わり、保護者との面談、地域からの苦情対応など、やっとどれもが一日の生活リズムとして刻まれ、苦にすることなく進められるようになったと感じた年でした。

「困った時の近隣の教頭先生頼み」　近隣校の教頭先生方は、文書関係は勿論、悩み相談にも応じて下さり、私の心強い味方でした。何度電話したことか、何度助けて頂いたことか。先生方の助けなくしては、今の私はなかったでしょう。

四年間の私の支えは、子供、保護者、先生方、そして地域の方々が“自分を必要としてくれている”と自分に言い聞かせることでした。学校の役に立っている、先生方の支えとなっている、子どもたち、保護者が頼りにしてくれているとの思いを胸に、自分を奮い立たせ、前向きに対応していった日々。もう一つの支えは、先生方の笑顔でした。あちこちから聞こえる笑い声、楽しいお喋り、あの“あったかい職員室”が私の心を豊かに、明るくしてくれ、職員室は私のオアシスでした。また、放課後、クラスの子どものことから始まり、校務分掌、家族などについて先生方と遅くまで話し込んだ日も多々あり、先生方を深く知る機会でもあり、心が安らぐ時間でもありました。

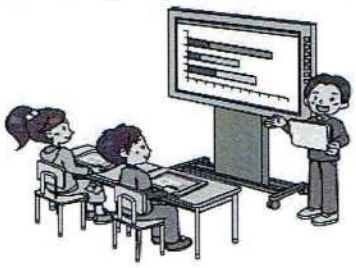
教職人生最後の密度の濃四年間を教頭として締めくくることができたことを幸せに思います。

「感謝の心で」

渡邉　権哉

私こと、平成二十七年三月三十一日、熊本市立月出小学校を最後に定年退職致しました。現在、熊本市の嘱託職員として週五日間働かせてもらっています。本当はゆっくりしたいところですが、六十一歳まで年金が入らない身なので、老体に鞭を入れているところです。

振り返れば私みたいな者が、三十八年間もよく教職が務まったと思っています。私の教員採用試験は、倍率二倍の広き門でした。大学を出るにあたり他にこれといった仕事も見つからなく、先生にでもなるかで受けた試験でした。初任の学校では、学生生活のリズムを崩せなく、昼休み教室でよく昼寝をしていました。年配の先生が多い職員室には馴染めず、子どもたちとまたよく遊んでいました。子どもたちにとって決して良い先生でなかったのですが、それでも子どもたちは私の言うことを純粋に聞き入れ、ついて来てくれました。先輩の先生方には、温かく育ててもらいました。「何と居心地の良い、素晴らしい職業だろう！」と気づいたのは、就職して三年経ってからでした。

その後、小学校八校二十六年、中学校三校十二年間の教職生活が、あっという間に過ぎ去って行きました。真っ直ぐで負けず嫌いな性格は始終変わらず、良くも悪くもいろいろなドラマを作りました。授業研究や部活動の指導等忙しくも有意義な日々でした。

さて、これからの人生ですが、いくつか若い頃から考えていたことがあるので、それをマイペースでやっていきたいと思っています。読書、旅行、運動、交友、奉仕活動等々もちろん、つれあいも一緒です。そして、今まで私を支えて下さった沢山の人々に感謝し、恩返しすることも、その一つだと考えているところです。